

連載

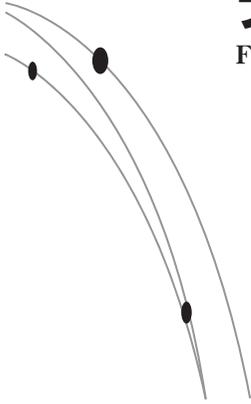
フィールド・アイ

Field Eye

サンディエゴにて——③

阿部 正浩

Masahiro Abe



グランド・キャニオンへの道

6月に入るとなると、夏休み中の計画で話は盛り上がる。日本に一時帰省する人もいれば、中南米への旅行を考える人もいる。私の場合は、今回が初めてのアメリカ滞在でもあり、夏休みには家族もやってくるので、グランド・キャニオンへの旅行を考えていた。

サンディエゴからグランド・キャニオンへは片道550マイル（約880km）ほど。自動車では約9時間の旅となる。一人ぶっ通して9時間を運転する自信がなかったの、ラスベガスを経由しての旅程を組んだ。サンディエゴからグランド・キャニオンのノース・リムへ陸路で行く場合、ラスベガスで遊ぶのはよくあるパターンだ。

ところが、6月末頃になってグランド・キャニオン行きに暗雲が垂れ込めてきた。もしかしたら、グランド・キャニオン国立公園が閉鎖されるかもしれないというのだ。

その頃、遠くワシントンでは、議会が連邦政府の債務上限を引き上げるかどうかで右往左往している最中だった。

ご存じの方も多だろうが、アメリカでは連邦政府の債務上限 Debt-ceiling が法律によって定められている。この法律 Liberty Bond Act は、そもそもは第一次世界大戦時の戦時国債発行のために1917年に定められたものだが、その際に連邦政府の資金調達の柔軟性を高めるために債務上限が設けられた。それ以前は連邦政府が借入れをするごとに議会が承認を与えていたが、1917年以降は議会が定めた上限内であれば財務省が自由に借入れを行えるようになったのであ

る。現在の債務上限もこの法律が根拠となっている。

ただし、債務の上限は時代とともに変化する。そのたびに大統領は議会に対して債務上限の引き上げを要請することになる。債務上限は1962年以降で74回ほど引き上げられてきた。直近では、2010年2月に14兆2940億ドルまで債務上限は引き上げられており、これはオバマ政権下での2回目の引き上げだった（因みに、引き上げ回数が多いのは18回のロナルド・レーガン政権下である）。

ところが、2011年4月になって議会は2011年度の連邦予算案を通過させたのだが、その時点で既に14兆8千億ドルほど歳入が不足しており、債務上限に達するのは時間の問題だとされていた。そして、もしも債務上限が引き上げられなければ、連邦政府は8月2日で債務不履行に陥ることもわかった。

連邦政府が債務不履行となれば、米国経済は大混乱になる。と同時に、連邦公務員もレイオフされる可能性があり、国立公園で働く職員もレイオフされるかもしれない。その場合には、グランド・キャニオンは閉鎖されるだろう。

日本であれば、政府が債務不履行に陥ったとしても公務員がレイオフされるということは考えられまい。たとえば、財政破綻団体となった夕張市のケースでは公務員給与の引き下げと希望退職者の募集はあったが、職員の解雇はなかった。給与引き下げや希望退職の場合でも、実施までにはある程度の時間が必要のため、市の業務がすぐにストップするというにはならなかった。

ところが、米国では政府の財政悪化とともに公務員のレイオフは瞬時に行われると言っても過言ではないようだ。2009年にカリフォルニア州政府の財政危機宣言と同時に、州公務員のレイオフが実施された。また、この頃に破産申請を申し立てたサンフランシスコに近い City of Vallejo では警察官の40%、消防士の50%をレイオフしているし、ロサンジェルス郡の City of Maywood にいたっては、警察と消防も含めた市職員全員が解雇されて、市の業務は全て民間にアウトソーシングされたのである。

そして6月28日になると、フロリダ州で1600人の職員が解雇されるというニュースがTVなどで報道されるようになった。州の公園が閉鎖されてしまい、遊びに来た子連れの家族が残念そうに帰る姿がTV画面には映し出されていた。フロリダ州の解雇問題は、州

政府の資金調達の日処がついたために数日で解消したのだが、こうしたアメリカでの現実を目の当たりにすると国立公園が閉鎖される可能性が低いわけではないようだ。

こうした事態に対して、当然ながらオバマ政権は債務上限の引き上げを再度議会に要請する。しかし大統領選を翌年に控え、特に共和党が「はい、そうですか」と上限引き上げを容認する訳はない。Tea Party運動の盛り上がりとも相まって、共和党はこれを機に財政支出の削減を強く求めると同時に、オバマ政権の政策の目玉の一つである医療制度を含めた社会保障改革への反対を強めていった。もし債務上限が引き上げられずに連邦政府が債務不履行の状態になれば、オバマ政権には大打撃を与えることになり、大統領選挙は共和党有利で展開されるという読みもある。

こうして米議会は硬直状態に陥った。債務上限の引き上げに関する議論は直接的に行われることはなく、大統領選挙を見据えた政党間の駆け引きのみが行われるだけだった。日に日に迫る財政破綻の問題は棚上げ状態となってしまったのだ。債務上限問題を政争の具にしてにっちもさっちもいかない米議会と政治家を、政権争いにかまけて震災後の復興計画が決められずいる日本の政治を例に引いて、Japanization だとマスコミは揶揄したのだった。

アメリカの政治が日本化したのかどうかを評価する能力を私は持ち合わせていない。しかし、日米の政治家たちの行動が必ずしも国民生活のためにはならない側面が強くなるようになったとは思える。日本での社会保障と税の一体改革における迷走ぶりもそうだし、アメリカでの医療改革でも同様のことが起きている。大局に立って政策を議論できる政治家はいないものだろうか。

そうこうしているうちに、8月2日は目前となった。欧州でのギリシャ危機も深刻な上に、アメリカが債務不履行になったら世界経済はどうなる。TVも新聞も債務上限問題で持ちきりだ。しかし7月31日、10年間で9170億円の財政支出削減と引き替えに、議会が9000億ドル分の債務上限引き上げについて同意したとの発表があった。8月1日には下院で可決、2日に上院で可決され、デッドラインぎりぎり米国政府の

債務不履行は回避された。

これで連邦政府の債務上限問題は解決し、グランド・キャニオン旅行が実現することになった。それにしてもこの大自然はどうだ。眼前にはサンディエゴやロスアンジェルスとは全く異なる景色が展開される。カリフォルニア州とアリゾナ州の境付近ともなると、たまに集落や町があるものの、延々と続く砂漠と赤茶けた岩で出来た山々があるだけだ。

グランド・キャニオンでの光景にはさらに圧倒された。日の出と日没の景色を見れば声も出ない。大勢の観光客がいたにもかかわらず、辺りはシーンと静まりかえっていた。足下には15億年前から5億年前までの地層が広がる。聞けば、峡谷の最下層では20億年前の地層が露出しているという。我々人類の歴史を超えた大自然を目前にして、人間社会がいかに成熟していないのかを思い知る。

ところで、グランド・キャニオンには柵がない。命がなくなっても不思議ではない場所に入り込み、写真撮影をしている人達がかかりいる。一歩間違えば谷底に真っ逆さまだ。日本国内ならば絶対に柵を設けているはずだ。自然のものは自然のものにしておくことらしい。とはいえ、観光シーズンにグランド・キャニオンやヨセミテなどで亡くなる人は少なくない。

「自己責任」や「自由」はアメリカで良く聞くキーワードだが、その思想は公園でも貫かれているようだ。観光客が自由を謳歌する代わりに、何かあった場合に自己責任を取らせるアメリカ。柵という規制で観光客の安全を確保する代わりに、自由を奪う日本。どちらが良いかはわからないけれども、こうした考え方が国民の行動規範に多大な影響を与えていることに違いない。そう言えば、雇用の違いも同じ話が出来そう

だ。ちなみに、ラスベガスではビギナーズ・ラックで大当たり。5ドルの元手で1泊分の宿泊代は十分に取れたようだ。

あべ・まさひろ 獨協大学経済学部教授。最近の主な著作に「雇用ポートフォリオの規定要因」『日本労働研究雑誌』No.610 (2011年5月)。労働経済学・経済政策専攻。